

# スポーツ系学科所属学生に対するキャリア意識の類型化

阿部 征大・清宮 孝文・門屋 貴久

## Classifying students in sports-related departments by type of career attitude

Yukihiro Abe, Takafumi Kiyomiya, Takahisa Kadoya

神戸医療福祉大学紀要 第21巻 第1号

(令和2年12月)

<原著>

## スポーツ系学科所属学生に対するキャリア意識の類型化

阿部 征大<sup>1)</sup>・清宮 孝文<sup>2)</sup>・門屋 貴久<sup>3)</sup>

### Classifying students in sports-related departments by type of career attitude

Yukihiro Abe<sup>1)</sup>, Takafumi Kiyomiya<sup>2)</sup>, Takahisa Kadoya<sup>3)</sup>

The purpose of this study is to ascertain the present state of and problems with career attitude among students in sports-related departments and to assist in future career education management.

The outcomes revealed in this study are summarized below.

(1) A factor analysis of the career readiness scale extracted five factors: “job-hunting preparation,” “positive attitude,” “career search,” “negative attitude,” and “desire to improve.”

(2) Through cluster analysis, career attitudes were classified into four types: “vague type,” “conflicted type,” “apathetic type,” and “ideal type.”

(3) Comparing each cluster and sex showed significantly high values for men with “conflicted type” and women with “vague type.”

(4) Comparing each cluster and club activity affiliation or absence thereof showed significantly high values for “ideal type” with club activity affiliation and “apathetic type” without club activity affiliation.

**Key words** : department of sports, career awareness, career readiness scale

スポーツ系学科、キャリア意識、キャリア・レディネス尺度

### 1. 緒言

近年、高等教育機関でキャリア教育の充実が進んでいる。その背景には、①少子高齢社会の到来、産業・経済の構造的変化や雇用の多様化・流動化、②就職・職業をめぐる環境の変化、③若者の勤労観、職業観や社会人・職業人としての基礎的・基本的な資質をめぐる課題、④精神的・社会的自立が遅れ、人間

関係をうまく築くことができない、自分の意志決定ができない、自己肯定感を持ってない、将来に希望をもつことができない、進路を選ぼうとしないなど、子どもたちの生活・意識の変容、⑤高学歴社会におけるモラトリアム傾向が強くなり、進学も就職もなかったり、進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」進学したりする若者の増加が挙げられている<sup>1)</sup>。キャリア教育に関して文部科

1) 神戸医療福祉大学 (Kobe University of Welfare) 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5

2) 日本体育大学博士後期課程 (Graduate School of Health and Sport Science, Nippon Sport Science University) 〒158-8508 東京都世田谷区深沢7-11

3) 松山大学 (MATSUYAMA UNIVERSITY) 〒790-8578 松山市文京町4-2

学省は、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」<sup>2)</sup>と定義付けしている。さらに、キャリア教育は様々な教育活動を通して実践されるものであり、一人一人の発達や社会人・職業人として自立を促す視点から、学校教育を構成していくための理念と方向性を示すもの<sup>3)</sup>と提示している。これらを踏まえ、松永<sup>4)</sup>は、キャリア教育を「社会の中で他者と関わりながら、自分の役割や価値を見出し、自分らしい生き方を創造していくために必要な、社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力、多様な社会グループにおける人間関係形成能力、自律的に行動する能力の形成を促す教育」と定義している。つまり、社会で自分らしく生きる上での能力の形成において、キャリア教育は重要な取り組みであると言える。また、経済産業省<sup>5)</sup>は「自己実現や社会貢献に向けて行動する」「多様な体験・経験や能力を組み合わせる」「学び続けることを学ぶ」という3つの能力と「主体性・働きかけ力・実行力・課題発見力・計画力・想像力・発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力・規律性・ストレスコントロール力」の12の能力要素を新・社会人基礎力とし、能力を発揮するにあたって、目的、学び、組合せのバランスを図ることが自らのキャリアを切り開いていく上で必要と位置付けている。3つの能力や12の能力要素は、社会にでる前に育成していくことが重要であり、これらを培うことがキャリア意識の形成に繋がると考えられる。そして、第3期教育振興基本計画<sup>6)</sup>において、「幼児期の教育から高等教育まで各学校段階を通じた体系的・系統的なキャリア教育を推進」し、高等教育段階では、「産業界と連携し、適正なインターンシップの更なる推進を図るとともに、ボランティア等の学外で行う活動の授

業の一環として位置付け、単位化を促進」されていることから学校教育におけるキャリア教育の重要性が伺える。

独立行政法人日本学生支援機構の調査<sup>7)</sup>によると、キャリア教育を必修科目として設定している大学は62.2%であり、多くの大学で取り組まれている。那須<sup>8)</sup>は、キャリア教育について「自分の将来性を見据えるという意味では、キャリア教育が重要な位置を占める」と述べ、勝又<sup>9)</sup>は、「キャリア教育において、社会の様々な問題と自身のキャリア形成をつなげ、不確実な社会で多様なキャリアを個々がどう形成していくかが重要なテーマになるだろう」と指摘している。このように、高等教育機関において、学生一人一人のキャリア形成を行う上でキャリア教育は重要な位置を占める。

中央教育審議会<sup>10)</sup>は、高等教育におけるキャリア教育の課題を「学校から社会・職業への移行を見据えたキャリア教育・職業教育の改善・充実」「社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度の育成」とし、教育全体の見直しとともに、育成を図る能力を明確化し、適切な体制の整備の必要性を示している。政府のキャリア政策の動向を整理した吉村<sup>11)</sup>は、高等教育機関におけるキャリア教育の課題を(1)基礎的・汎用能力の育成を、どのようにキャリア教育に組み入れるかという問題(2)大学における職業教育の位置付けの2点を挙げている。大学教育におけるキャリア教育の意義と課題を研究した毛受・馬場<sup>12)</sup>は、「キャリア教育は特定のゴールを明確化せず、いかなるゴールにも対応できる基礎力・汎用的能力の育成や自立心の養成が目標となる」と説明し専門性と汎用性を同時に満たすために各大学で創意工夫が求められている状況にあると指摘している。長谷川<sup>13)</sup>は、「大学教育においてキャ

リア教育が浸透し学部教育を通して就職力を高めたいといったニーズが強まっている中で、それに応えるカリキュラムが整備されていない」と指摘し、各大学は、立ち位置を把握しながら教育に取り組むことが求められると述べている。さらに、独立行政法人日本学生支援機構<sup>7)</sup>はキャリア教育に対する課題として「学生の自己理解・自己管理能力の育成(51.0%)」と「低学年次からの指導の拡大(48.2%)」を挙げている。このように、キャリア教育の重要性が挙げられてる中、各大学での工夫や学部教育、カリキュラム等の特色を活かすキャリア教育の充実が求められる一方で、キャリア教育に対する課題も指摘されており、多様化する学生のキャリア意識について検討する必要性があると考えられる。

松永<sup>4)</sup>は、キャリア教育研究における課題について「キャリア形成を行うために必要となる能力が十分に獲得できないまま、不十分な能力の積み重ねで社会生活を送る場合、さまざまな課題が生じ、結果、生きづらさとなってしまふ」と述べ、平田<sup>14)</sup>は「最新の情報、現実面に即したキャリア教育の在り方をさぐり、講義内容や学生の主体的活動力を伸ばす指導法等について検討し、より深めていくことが、喫緊の課題」と指摘している。さらに、宮田<sup>15)</sup>は「『キャリア教育』の全体像を掴むには、科目レベル、機関・制度的レベルにおいても各領域を網羅したデータ収集と分析は欠かせない。従って、各領域の研究課題を克服したうえでそれらを紡ぐ作業が必要」と指摘している。このように、高等教育機関のキャリア教育に対する多くの課題を解決するためには、キャリア教育の在り方や指導法の検討、そして各領域に対し様々なデータ収集が必要であることが伺える。よって、各大学でのキャリア教育の在り方や学生の傾向を捉えることが必要であり、キャリア意識についてのデー

タ収集および分析が今後のキャリア教育において重要になると考える。

そこで本研究は、キャリア意識についての現状と課題を把握し、今後のキャリア教育マネジメントの一助とすることを目的とする。

## 2. 先行研究の検討

### 2.1 近年のキャリア教育

高等教育機関では、就職支援とキャリア支援を発展させ、キャリア教育を位置づけ、入学後の段階からカリキュラム化の検討・導入が積極的に進められてきた。そして、独立行政法人日本学生支援機構<sup>7)</sup>は「学生個人のキャリア意識形成や就職活動を支援するだけでなく、学生の就職状況が大学の評価にもつながりうるため、いまや多くの大学等においてきわめて重要な教育・支援活動となっている」と指摘している。

大学10学部を対象とした安保<sup>16)</sup>は、学部によって学生のキャリアへの関心性が異なることを指摘している。キャリア教育の先進的な取り組みを行っている大学に着目した森平<sup>17)</sup>は、大学5校から教育方法の詳細や成果と課題をヒアリング調査し比較研究を実施した。その結果、キャリア教育のプログラムに共通している点として、①活動拠点となるセンター機能が存在すること②様々な仕掛けが効果的に相乗効果を発揮するような系統立ったキャリア教育プログラムを組み立てていること③社会人として必要とされる基礎力の向上を目的として、学生がオープンキャンパスや企業説明会を企画・運営したり、地域との連携事業を行ったりするPBLを実施していること④グループディスカッションの力を養うためにトレーニングの機会を設けていること⑤低学年から将来のキャリアについて考える機会や企業関係者と接するイベントなどが

あることの5つを挙げている。さらに、「学生のキャリア教育や就職支援に王道はなく、先進事例を参考にしながら各大学の特性に合ったアプローチを用いること、また様々な仕掛けが効果的に相乗効果を発揮するような系統立ったプログラムを組み立ててゆくことが重要である」と指摘している。先進事例では、低学年からキャリアを考える機会を作ることが挙げられていることから、低学年のキャリア教育に着目する必要がある。

体育専攻大学生のキャリアプランニング教育に着目している三木・三波の研究<sup>18)</sup>では、2年次までは専門性に関連した職業に就くことを希望しているが、その希望通りに進むことは多くないと指摘している。その理由として、「危機感や覚悟が持てない」「学生生活の中で将来の仕事について考えるには時間と情報が不十分」「自分に合った仕事を見つけるのが難しい」が挙げられている。さらに、スポーツ健康学科の学生のキャリアデザインに着目した尾川ら<sup>19)</sup>は、「職業観を育成する教育の機会を1年生時に充実させることにより、自己の職業的キャリアアンカーを再確認させる」ことが必要であるとしている。これらのことから、1・2年生は将来の職業についての意思決定の希薄さや情報不足が挙げられ、1・2年生時はキャリア形成の構築に重要な時期であると捉えることができることから、早期から自身のキャリア意識を構築させていくことや意思決定においての情報を多く提供することが求められる。

## 2.2 キャリア・レディネス尺度

キャリア・レディネス尺度は「大学生が自分のこれからの人生・生き方、職業選択・就職などについて、どの程度成熟した考えを持っているのかを測定する」<sup>20)</sup>ことを目的に作成された尺度である。この尺度は、学生のキャリア意識を「職業キャリア関心性」「職

業キャリア自律性」「職業キャリア計画性」<sup>20)</sup>から測るものであり、信頼性と妥当性が確認されている。キャリア・レディネス尺度を援用した研究は、10学部を対象とした安保らの研究<sup>16)</sup>があり、学部によってキャリアに対する関心性が異なることが明らかとされている。また、同尺度を援用して1・2学年を対象とした森山の研究<sup>21)</sup>は、「学生のキャリア計画に関するイメージする力の低さ、目標を持って具体的な行動に移す困難さ」があることを明らかにしている。一方で、館岡・會田<sup>22)</sup>は自律性と計画性は学年が上がるにつれ変化するが、関心性は変化しないことを報告している。よって、学部間や学年間でもキャリア意識に差異が表れることが示唆される。さらに、キャリア・レディネス尺度を用いた阿部らの研究<sup>23)</sup>では、キャリアに対して「自己の信念」を持つ者は「計画的な就職活動」を考え就職活動への関心が高いことを明らかにしている。

以上のようにキャリア・レディネス尺度は、様々な研究で活用されており、学生のキャリア意識を測るために効果的であることから、本研究においても使用することにした。

## 2.3 本研究の枠組み

これまでの研究を踏まえ、スポーツ系学科に所属する1・2学年の学生のキャリア意識を測るため、キャリア・レディネス尺度<sup>20)</sup>を援用し、探索的な手法で構造化を行う。さらに、類型化することによりキャリア意識の傾向を把握し、スポーツ系学科に所属する学生に適応したキャリア支援の取組みを検証する足掛かりとする。

## 3. 研究方法

本調査の統計処理はSPSS Statistics 25を用いて行い、有意水準は5%未満とした。

### 3.1 調査対象者

本調査は、2019年1月にスポーツ系学科に所属する大学生131名を対象に、質問紙を用いた集合調査法にて実施した。

### 3.2 調査項目

#### 3.2.1 基本的属性

基本的属性は、性別（男性・女性）、学年（1学年・2学年）、部活動所属の有無とした。

#### 3.2.2 キャリア・レディネス尺度

調査項目は坂柳<sup>20)</sup>の「キャリア・レディネス尺度」27項目（表1）を用い、「非常によ

くあてはまる…5」、「あてはまる…4」、「どちらともいえない…3」、「あてはまらない…2」、「全くあてはまらない…1」の5件法で回答を求めた。

### 3.3 分析方法

まず始めに、キャリア・レディネス尺度の構造把握のため、探索的因子分析を用いてキャリア意識因子の抽出を行った。具体的には、「キャリア・レディネス尺度」27項目を使用し、探索的因子分析（最尤法・プロマッ

表1 キャリア・レディネス尺度測定項目

質問項目	項目省略名
これからの人生や生き方についてとても関心を持っている	これからの人生や生き方に関心
希望する職業に就くにはどうすれば良いか調べたことがある	希望職業に就くには何をするか調べる
どのような職業が自分に向いているのか真剣に考えたことがある	向いている職業を考える
職業人になったら自分から進んで積極的に仕事をしようと思う	仕事への積極的な姿勢
充実した職業生活を送れないのは自分自身の責任が大きいと思う	不十分な職業生活は自身の責任
職場で難しい問題にぶつかっても自分なりに克服していこうと思う	仕事に対しての課題解決
希望する職業に就くための具体的な計画を立てている	就きたい職業への計画
どのような職業に就きたいかまだわからない	就きたい職業未決定
職業選択や就職は自分の個性と就職機会の両面から十分に考えている	職業選択や就職は個性と機会の両面
職業や就職に関する記事には良く目を通すようにしている	職業・就職に関する記事に目を通す
将来の職業や就職先についていろいろ比較し検討している	職業・就職先の比較検討
自分は何のために働くのか真剣に考えた事がない	働くための意味を考えない
就職の準備は他の人から言われなくても自主的に進めることができる	就職活動を自主的に実行
職業人になってからは、責任を自覚して仕事に取り組もうと思う	仕事に対する責任と自覚
職業生活を充実させるためには面倒なことでも積極的にチャレンジする	職業生活充実への積極的姿勢
自分は将来どのような職業についているかわからない	就いている職業無想像
どのような職業人になりたいのか自分なりの目標を持っている	自分なりの職業人になる目標
すでに計画に従って就職試験のための勉強をしている	計画的な就職活動対策
将来の職業生活をどう過ごすかはあまり関心がない	将来への関心なし
将来、充実した職業生活を送るための参考となる話は注意して聞いている	将来のために参考になる話を聞く
職業選択や就職は自分にとって重要な問題なので真剣に考えている	職業選択・就職は真剣に考えている
職業の選択・決定では周囲の雰囲気流されることはない	職業選択は雰囲気に流されない
職業人になっても、責任の重い仕事はやりたくない	責任の重い仕事はしたくない
職業生活を通して、さらに自分自身を向上させたい	職業生活中の自己成長希望
自分の将来の職業生活の様子はだいたい想像できる	将来への想像
今希望している職業は、またすぐに変わるかもしれない	現希望職業の変更
就きたい職業を決めたが、それに向けての積極的な努力は特にしていない	就きたい職業への努力なし

クス回転)を実施した。その際、スクリーンプロットの傾向から因子抽出数を決定し、各因子に対する負荷量が.40未満の項目を削除することにした。尚、抽出された因子に対してはCronbachの $\alpha$ 係数を用いてデータの信頼性を確認する( $\alpha$ 係数 $\geq .70$ )<sup>24)</sup>。

次に、キャリア意識の類型化を試みるため、クラスター分析を実施した。具体的には、上述した因子分析から因子得点を算出し、この得点に対してword法を用いたクラスター分析を行った。そして、クラスター化された因子得点を使用して、分散分析を利用したキャリア意識の類型化を試みた。

最後に、類型化されたキャリア意識と属性でクロス分析を実施した。また、クロス分析の際、 $\chi^2$ 検定から有意確率を求めた。

#### 3.4 倫理的配慮

調査対象者に対し、調査実施前に調査内容およびデータの使用方法等を口頭にて説明し、同意が得られた方のみを対象に調査を行った。その際、無記名によるアンケート調査のため、調査対象者に不利益が被らないことも伝えた。尚、未成年を含む学生を対象とした質問紙を用いた研究であるが、著者の所属する大学の学生に限られてるため、チェックリストにより倫理審査の必要性はないと判断した。

## 4. 結果

回収したアンケート用紙を精査し、2重回答や誤答のあったアンケート用紙を排除した結果、有効回答数107枚、有効回答率81.6%となった。

#### 4.1 調査対象者の属性

表2は、調査対象者の属性についてまとめた結果である。性別においては「男性」72.0%、「女性」28.0%という結果であった。

学年では「1年生」50.9%、「2年生」49.1%であり、部活動所属の有無では「所属」61.9%、「無所属」38.1%という結果であった。

表2 調査対象者の属性

項目	度数	%	
性別	男性	77	72.0
	女性	30	28.0
学年	1年生	54	50.9
	2年生	52	49.1
部活動所属	所属	65	61.9
	無所属	40	38.1

$n=107$  ( $n,\alpha$  除く)

#### 4.2 探索的因子分析

表3は「キャリア・レディネス尺度」27項目に対して探索的因子分析を行った結果である。スクリーンプロットの傾向から5因子を抽出し、因子負荷量が.40未満の項目を削除したところ、5因子20項目で収束した。

第1因子( $\alpha = .884$ )は、「職業・就職に関する記事に目を通す」「職業・就職先の比較検討」「就職活動を自主的に実行」「計画的な就職活動対策」「将来のために参考になる話を聞く」「職業選択・就職は真剣に考えている」「希望職業に就くには何をするか調べる」の7項目で構成され、就職活動の準備や備えを表す内容であることから「就職準備」と名付けた。第2因子( $\alpha = .811$ )は、「仕事への積極的な姿勢」「これからの人生や生き方に関心」「仕事に対しての課題解決」の3項目で構成され、仕事や職業に対してポジティブに捉える内容であることから「ポジティブ意識」と名付けた。第3因子( $\alpha = .766$ )は、「就きたい職業未決定」「就いている職業無想像」「現希望職業の変更」の3項目で構成され、将来の職業について模索している内容であることから「進路模索」と名付けた。第4因子( $\alpha = .841$ )

は、「責任の重い仕事はしたくない」「働くための意味を考えない」「将来への関心なし」「就きたい職業への努力なし」の4項目で構成され、仕事や職業に対してネガティブに捉える内容であることから「ネガティブ意識」と名付けた。第5因子 ( $\alpha = .838$ ) は、「職業生活中の自己成長希望」「職業生活充実への積極的姿勢」「仕事に対する責任と自覚」の3項目で構成され、職業生活に対する向上心を表す内容であることから「向上心」と名付けた。

以上の5因子に対し、Cronbach の  $\alpha$  係数を用いて信頼性を検証したところ、すべての因子において基準値 ( $\geq .70$ )<sup>24)</sup> を満たすことができた (第1因子 : .884、第2因子 : .811、第3因子 : .766、第4因子 : .841、第5因子 : .838)。したがって、20項目5因子において尺度の信頼性が確認された。

表3 キャリア・レディネス尺度に関する確認的因子分析

項目	F1	F2	F3	F4	F5	$\alpha$
<b>【第1因子：就職準備】</b>						
職業・就職に関する記事に目を通す	0.937	0.021	-0.123	0.069	-0.175	
職業・就職先の比較検討	0.808	0.026	-0.156	0.12	-0.044	
就職活動を自主的に実行	0.735	-0.05	0.115	0.013	0.086	
計画的な就職活動対策	0.679	0.029	-0.102	0.336	-0.101	0.884
将来のために参考になる話を聞く	0.597	-0.15	0.065	-0.105	0.386	
職業選択・就職は真剣に考えている	0.581	0.127	-0.064	-0.24	0.298	
希望職業に就くには何をするか調べる	0.422	0.237	-0.077	0.009	0.128	
<b>【第2因子：ポジティブ意識】</b>						
仕事への積極的な姿勢	0.041	0.821	-0.07	-0.048	0.041	
これからの人生や生き方に関心	-0.175	0.747	-0.042	0.251	0.156	0.811
仕事に対しての課題解決	0.15	0.685	0.079	-0.095	-0.066	
<b>【第3因子：進路模索】</b>						
就きたい職業未決定	-0.192	-0.088	0.803	0.05	-0.073	
就いている職業無想像	-0.188	-0.046	0.772	-0.038	0.033	0.766
現希望職業の変更	0.106	0.299	0.651	0.097	-0.201	
<b>【第4因子：ネガティブ意識】</b>						
責任の重い仕事はしたくない	-0.011	0.068	-0.036	0.898	0.104	
働くための意味を考えない	0.177	-0.239	0.322	0.450	0.211	
将来への関心なし	0.219	-0.081	0.347	0.445	-0.045	0.841
就きたい職業への努力なし	0.073	0.16	0.29	0.437	0.039	
<b>【第5因子：向上心】</b>						
職業生活中的自己成長希望	-0.148	0.04	-0.211	0.284	0.944	
職業生活充実への積極的姿勢	0.074	0.28	0.043	-0.069	0.594	0.838
仕事に対する責任と自覚	0.11	0.185	0.289	-0.143	0.486	
因子間相関						
F1	-					
F2	0.601	-				
F3	0.302	0.189	-			
F4	0.296	0.06	0.48	-		
F5	0.63	0.631	0.253	0.009	-	



### 4.3 キャリア意識の類型化

#### 4.3.1 クラスタ分析

表4は抽出された因子得点に対し、クラスタ分析を行った結果である。第1クラスタ 34.6%、第2クラスタ 20.6%、第3クラスタ 28.0%、第4クラスタ 16.8%となり、第1クラスタが最も多くなった。

#### 4.3.2 クラスタごとの因子得点

表5はクラスタごとの因子得点の平均値を示したものである。第1クラスタはキャリアに対する「ネガティブ意識」は低いにも関わらず、他の因子は顕著に低い傾向が見られないことから、漠然と将来の就職について考えている特徴があり、「漠然型」と解釈した。第2クラスタは「就職準備」が最も高く、「ネガティブ意識」、「進路模索」も高い傾向にあった。すなわち、就職の準備を行ってはいないがキャリアに対するネガティブなイメージも有し、将来の進路も定まっていない特徴があることから、「葛藤型」と解釈できる。第3クラスタは、キャリアに対して後ろ向きな「ネガティブ意識」のみ因子得点が正の値を示し、他の前向きな因子は負の値を示している。一方で、「進路模索」は因子得点が低いことから、キャリアに対する向上心やポジティブなイメージはないが、進路を探している状況で

もない無気力な特徴が第3クラスタにはあると考える。したがって、このクラスタを「無気力型」と解釈する。第4クラスタは「就職準備」、「ポジティブ意識」、「向上心」の因子得点が高く、「進路模索」、「ネガティブ意識」の因子得点が低い。すなわち、キャリアに対するイメージが前向きであり、就職への準備も行い、進路も定まっている傾向にあることから、キャリアに対して「理想型」の集団と解釈した。

#### 4.3.3 各クラスタの属性

表6は4つのクラスタごとにクロス分析から属性を分けた結果である。また、属性ごとに $\chi^2$ 検定を行い、集団の特徴をより明確化した。尚、 $\chi^2$ 検定による調整済みの残差が1.98以上のクラスタは有意差があることになる。

性別では、 $\chi^2$ 検定の結果、有意差が確認され、男女間に差があることが示された。特に男性では「葛藤型」、女性では「漠然型」が多い傾向にあった。学年では、 $\chi^2$ 検定の結果、有意な差は確認できなかった。しかし、1年生は「漠然型」、2年生は「無気力型」が多い傾向にあった。部活動所属の有無では、 $\chi^2$ 検定の結果、有意差が確認され、所属群と無所属群の間に差異が生じていることが示

表4 クラスタ分析結果

	第1クラスタ	第2クラスタ	第3クラスタ	第4クラスタ
n (%)	37 (34.6)	22 (20.6)	30 (28.0)	18 (16.8)

表5 クラスタごとの因子得点

因子項目	第1クラスタ	第2クラスタ	第3クラスタ	第4クラスタ	F値	p値
	漠然型	葛藤型	無気力型	理想型		
就職準備	-0.15	1.35	-0.95	0.24	82.48	***
ポジティブ意識	-0.06	0.9	-1.01	0.7	56.1	***
進路模索	0	1.03	-0.1	-1.09	34	***
ネガティブ意識	-0.43	1.2	0.27	-1.02	61.67	***
向上心	-0.02	0.87	-1.06	0.73	60.8	***

\*\*\* $p<0.001$

表6 各クラスターの属性

項目	第1クラスター 漠然型	第2クラスター 葛藤型	第3クラスター 無気力型	第4クラスター 理想型
【性別】***				
男性	56.8 (27.3)	<u>90.9 (26.0)</u>	76.7 (29.9)	72.2 (16.9)
女性	<u>43.2 (43.2)</u>	9.1 (6.7)	23.3 (23.3)	27.8 (16.7)
【学年】				
1年	59.5 (40.7)	50.0 (20.4)	41.4 (22.2)	50.0 (16.7)
2年	40.5 (28.8)	50.0 (21.2)	58.6 (32.7)	50.0 (17.3)
【部活】*				
所属	55.6 (30.8)	77.3 (26.2)	46.7 (21.5)	<u>82.4 (21.5)</u>
無所属	44.4 (40.0)	22.7 (12.5)	<u>53.3 (40.0)</u>	17.6 (7.5)

\*\*\* $p < 0.001$ , \*\* $p < 0.01$ , \* $p < 0.05$

※下線は有意差あり、また ( ) 内の数値は横に合計する。

された。特に、所属群は「理想型」、無所属群は「無気力型」が多い傾向にあった。人生観では、 $\chi^2$ 検定の結果、有意差が確認され、「人生観」によってキャリアに対する意識に差が生じることが示された。特に、「人生観」が出世型の学生は「葛藤型」、のんき型の学生は「無気力型」、清く正しく型の学生は「理想型」に多く属することが示された。また、有意差はないが世のため型の学生は「漠然型」が多い傾向にあった。

## 5. 考察

本研究は、スポーツ系学科に所属する学生のキャリア意識の現状と課題を把握し、今後のキャリア教育マネジメントの一助とすることを目的とした。

キャリア・レディネス尺度の探索的因子分析の結果から、本研究では5因子が抽出され、「ポジティブ意識」や「向上心」というプラス思考傾向を示す因子やマイナス思考傾向を示す「ネガティブ意識」や「進路模索」が抽

出された。また、就職に対して準備している因子の「就職準備」が抽出されている。キャリア・レディネス尺度を作成した坂柳<sup>20)</sup>は、「関心性」「自律性」「計画性」の3因子を抽出している。さらに、阿部ら<sup>23)</sup>は「キャリアに対する自己の信念」「就職への悲観」「計画的な就職活動」「就職活動への関心」の4因子を抽出した。本研究では、同尺度を援用し5因子が抽出されていることから、本学の学生のキャリア意識は他の研究と比較して多様化していることが伺える。特に本研究では、前向きな因子と後ろ向きな因子が顕著に表出していることから、キャリアについて幅広い認識を抱いていると推察する。

結果で示した通り、スポーツ系学科に所属している1・2年生のキャリア意識は4つのグループに類型化された。中でも最も多かったのは第1クラスターの「漠然型」であり、次いで、第3クラスターの「無気力型」であった。したがって、キャリア意識について漠然と考えている層とキャリアについて何も考えていない層が多く存在することが示された。浦上

<sup>25)</sup> は、「職業について考えることを避け、無関心や問題の先送りをするような姿勢は、社会への移行を間近に控えた大学生として望ましいものとはいえない」と指摘しているように、自身のキャリア意識に無関心であることはキャリア形成に望ましくないとと言える。しかしながら、本研究は1・2年生を対象としているため、このような結果になったのではないかと考えられる。そのため、漠然と考えている層に対しては、具体的職業イメージを持たせることが重要であり、無気力の層に対しては、学生自身が現在、興味関心を抱いている事柄からアプローチを試み、将来についてイメージさせることが重要であると考えられる。よって、対話を通じて興味関心を引きだすような取組みが効果的であると推察する。また、「学生に寄り添う学生支援」を実施している先進事例<sup>7)</sup>の報告がされていることから、一人一人と積極的かつ自発的なサポートが必要になる。

体育学専攻学生のキャリア意識の構造化を図った研究<sup>23)</sup>において、キャリアに対しての自己の信念を抱いているものは、計画的な就職活動が高いことを明らかにされている。さらに、長岡・松井<sup>26)</sup>は、進路選択の自己効力が高いほど、計画度や自立度が高いことを明らかにしている。このように、自己の信念や自己効力は就職活動に対し計画性を生む。本研究で類型化された「葛藤型」や「理想型」は、自身のキャリアに対し少なからず意識し計画しているため、この意識や計画性をより早い段階で信念に繋げることが有意義なキャリア意識に成り得るのではないかと。

性別では、男性が「葛藤型」、女性が「漠然型」に多く属する傾向にあることが示された。「葛藤型」は就職に対し準備を行っているがネガティブなイメージもあり、将来の進路が定まっていない特徴がある。したがって、

男子学生は自身のキャリアについて理想と現実で葛藤している傾向にあると考えられる。葛藤感を軽減させることはもちろんのことではあるが、学生時代に将来の自分をイメージし自身と葛藤することは人間的成長を促進させる一面もあるのではないかと。

女子学生が多く属する「漠然型」はキャリアに対する負のイメージはないが、特に就職準備を行っていない特徴があり、将来のことを考えていない特徴がある。キャリア教育の取組みを女子学生の実態から分析した安井<sup>27)</sup>は、「女子のライフコースは、仕事以外にも、結婚、出産、育児といったライフイベントによって多様化する側面があり、男子学生とは異なるキャリアデザインが必要」と指摘している。さらに、女子大学生のキャリア意識に着目した戸田・岩瀬<sup>28)</sup>は、「性役割に依存する女子大学生への教育のあり方については、自己の役割を果たす重要性を認識させ、思考の転機を図るための重点的な教育施策の展開が必要」と指摘している。このように、性差によるキャリア支援の取組みの重要性が示されている。本研究においても男子学生と女子学生では有意差が生じた。「漠然型」は、ネガティブ意識はないが他の因子には低い傾向は見られなく将来について漠然と考えている傾向がある。性差でのキャリア意識の構築を模索する際、女子学生の漠然と考えている将来を具体化させるきめ細かな取組みも重要になるだろう。

さらに、戸田・岩瀬<sup>28)</sup>は『1・4年』は『2・3年』に比べ、キャリア意識が高いと述べ、この傾向は男子学生においても同等の傾向が予想されると指摘されている。鳥影<sup>29)</sup>は、1・2年生は、仕事の具体的なイメージが湧く教育が必要とし、3・4年生に対しては大学から仕事へどのように移行したらいいのか具体的な方法や手法を指導する必要があると指摘

し、村上ら<sup>30)</sup>は、「2年次に効果的なキャリア教育を実施し、その過程で理想と現実とを統合できる力を養うことが、有能な社会人として活躍できる人材の育成に重要」と述べている。さらに阿部ら<sup>23)</sup>は、インターンシップを経験しているものは就職活動への関心が高まると指摘している。よって、本研究においては学年での有意差は確認できなかったが、キャリアについて1年生では漠然と考えており、2年生は無気力傾向にあることが示された。そのため、1年次には職業についてのイメージを膨らませること、2年次には無気力にならないよう早期からインターンシップ等の参加を促すことが重要である。

次に、部活動所属の有無では、所属群が「理想型」、無所属群が「無気力型」に多く属する傾向となった。体育会に所属する学生のキャリア意識に着目した小野<sup>31)</sup>は、大学の授業で最も学びたい要因は将来の職業で役立つ知識や技能、専門的な知識や技能であり、資格取得のために熱心に取組むという学生が多いと述べている。また、大半の学生が早期段階から将来の就きたい職業に対して考えている傾向にあると指摘している。言い換えると、就きたい職業があり、そのために専門的知識や資格取得に向け取組む傾向にあると言える。松尾<sup>32)</sup>は、体育会を含めた部活・サークル活動は大学生活の一部であり、就職活動の結果は大学生活の過ごし方や本人の特性・資質・企業の意図など様々な影響を受けると指摘している。また、部活動やサークル活動で学んだ人間的成長が就職意識にも影響を与えると述べている。このように、部活動経験は人間的成長や職業意識にも大きく影響を与え、本研究においても部活動に所属している学生が「理想型」に属する傾向が出たと推察する。一方で、無所属群は、「無気力型」が多い傾向となった。阿部ら<sup>23)</sup>は、キャリア

に対して無関心の学生には、不安の解消や具体的な職業イメージを持たせるなどの情報提供が必要であると述べている。さらに、上述した通り、無気力傾向にある学生に対しては対話を通じて興味関心を引き出すような学生に寄り添う支援が効果的である。部活動に所属していないため、日頃の授業やオフィスアワーを活用し学生と寄り添うことの必要性も挙げられる。部活動無所属の無気力傾向にある学生のキャリア意識を早期に構築させるためのアプローチは最も重要な課題である。

島影<sup>29)</sup>は、キャリアが持つ意味を「過去の自分の延長が現在の自分を形作っており、現在の自分が将来の自分の基礎となる」とし過去・現在・未来と連続する自分の人生を気づかせ考えさせることにつながると述べている。よって、社会にでる移行期ともいえる大学生のうちしっかりとした職業観や就職意識を構築させることは大学生活の充実に繋がるとともにキャリア意識向上にも繋がると推察する。

## 6. まとめ

本研究は、スポーツ系学科に所属する学生のキャリア意識の現状と課題を把握し、今後のキャリア教育マネジメントの一助とすることを目的とした。

本研究で明らかになったことは以下に集約される。

- (1) キャリア・レディネス尺度を因子分析した結果、「就職準備」「ポジティブ意識」「進路模索」「ネガティブ意識」「向上心」の5因子が抽出された。
- (2) キャリア意識について、クラスター分析の結果、「漠然型」「葛藤型」「無気力型」「理想型」の4つに分類された。
- (3) 各クラスターと性別を比較した結果、男

性「葛藤型」、女性「漠然型」で有意に高い値を示した。

(4) 各クラスターと部活動所属の有無を比較した結果、部活動所属「理想型」、部活動無所属「無気力型」で有意に高い値を示した。

本研究にて明らかとなったスポーツ系学科に所属する学生のキャリア意識傾向から、さらにキャリア教育マネジメントの取組みを充実させていくために年次変化を検証していく必要も今後の課題として挙げられる。

## 【文献】

- 1) 文部科学省：キャリア教育が求められる背景とその基本的な考え方、2004  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/career/05062401/001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/05062401/001.htm) (参照日2020年7月14日)
- 2) 文部科学省：キャリア教育とは何か、2011  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_icsFiles/afield-file/2011/06/16/1306818\\_04.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afield-file/2011/06/16/1306818_04.pdf) (参照日2020年7月14日)
- 3) 文部科学省：キャリア教育・職業教育の課題と基本的方向性、2011  
[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_\\_icsFiles/afield-file/2011/02/01/1301878\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afield-file/2011/02/01/1301878_1_1.pdf) (参照日2020年7月14日)
- 4) 松永繁：日本におけるキャリア教育と課題－キャリア教育の先行研究からの検討－、敬心・研究ジャーナル、1 (1)、27-36、2017
- 5) 経済産業省産業人材制作室：人生100年時代の社会人基礎力について、2018  
[https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou\\_wg/pdf/007\\_06\\_00.pdf](https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf) (参照日2020年9月13日)
- 6) 文部科学省：第3期教育振興基本計画、2018  
[https://www.mext.go.jp/content/1406127\\_002.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1406127_002.pdf) (参照日2020年7月16日)
- 7) 独立行政法人日本学生支援機構：大学等における学生支援の取組状況に関する調査(平成29年度)結果報告、2017  
[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi\\_chosa/\\_\\_icsFiles/afield-file/2018/11/29/1\\_kekka.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/__icsFiles/afield-file/2018/11/29/1_kekka.pdf) (参照日2020年7月16日)
- 8) 那須幸雄：わが国大学におけるキャリア教育の現状と動向－中部、関西、九州の代表的9大学にみる事例研究－、文教大学国際学部紀要、15 (1)、81-95、2004
- 9) 勝又あずさ：社会問題に向きあうキャリア教育の実践と問題－成城大学キャリア開発演習科目を例に－、社会イノベーション研究、13 (2)、39-60、2018
- 10) 中央教育審議会：今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について、2011  
[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_\\_icsFiles/afield-file/2011/02/01/1301878\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afield-file/2011/02/01/1301878_1_1.pdf) (参照日2020年7月15日)
- 11) 吉村大吾：キャリア政策の動向と高等教育機関の現状、追手門経済論集、47 (2)、152-174、2013
- 12) 毛受芳高、馬場栄郎：大学教育におけるキャリア教育の意義と課題－ソーシャルビジネス・インターンシップが生み出す共感創出と物語性－、経営研究、25 (1,2)、愛知学泉大学経営研究所、39-48、2012
- 13) 長谷川誠：キャリア教育政策の今日的課題－初等中等教育から高等学校への接続を視点に－、神戸松蔭女子学院研究紀要人間

- 科学部篇、7、27-41、2018
- 14) 平田治夫：キャリア教育の背景・課題について－情勢の確認と今後の方向性－、神奈川大学心理・教育研究論集、24、275-283、2017
- 15) 宮田弘一：大学の「キャリア教育」に関する研究、広島大学高等教育研究開発センター大学論集、50、287-302、2018
- 16) 安保英勇、石津憲一郎、菊池武剋、千葉政典、猪股歳之、東北大学における学部学生のキャリア意識 (3)－キャリア・レディネスと職業志向－、東北大学大学院教育研究科研究年報、57 (2)、151-163、2009
- 17) 森平直子・坂本俊輔・玉城逸彦：大学におけるキャリア教育の取り組み－5大学ヒアリング調査による比較研究－、城西大学経済経営紀要、32、2014
- 18) 三木ひろみ・三波千穂美：体育専攻大学生のキャリアプランニング教育－職業意識を高めるための授業「総合演習Ⅱ」の効果、筑波大学体育科学系紀要、31、109-129、2008
- 19) 尾川信之・岡室悠介・小林未季代：スポーツ健康学科生のためのキャリアデザイン～キャリアチェンジと本意就職～、スポーツ健康学会誌、2、21-27、2017
- 20) 坂柳恒夫：大学生のキャリア成熟に関する研究－キャリア・レディネス尺度 (CRS) の信頼性と妥当性の検討－、愛知教育大学教科教育センター研究報告、20、9-18、1996
- 21) 森山廣美：大学におけるキャリア教育の検証 (序章)、四天王寺国際仏教大学紀要、45、579-587、2008
- 22) 館岡周平、會田玉美：作業療法学生のキャリア成熟度とカリキュラムの関係性に関する研究、目白大学健康科学研究、12、9-20、2019
- 23) 阿部征大、清宮孝文、門屋貴久：体育専攻学生のキャリア意識に関する研究－キャリア・レディネス尺度を用いて－、日本体育大学紀要、49、1033-1042、2020
- 24) 小塩真司：SPSS と Amos による心理・調査データ解析－因子分析・共分散構造分析まで－、東京書店、269、2018
- 25) 浦上昌則：学生の職業的アイデンティティの検討－30年前との比較を通して、南山大学紀要、アカデミア. 人文・自然科学編、13、71-84、2017
- 26) 長岡大・松井賢二：大学生における進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連、進路指導研究、19 (1)、10-17、1990
- 27) 安井智恵：大学におけるキャリア教育の取り組みに関する一考察－女子学生の実態分析を中心に－、岐阜女子大学紀要、36、79-89、2007
- 28) 戸田里和・岩瀬靖彦：女子大学生のキャリア意識－学年差および理想とするライフコース別の検討－、人間生活文化研究、28、131-136、2018
- 29) 島影義和：大学におけるキャリア教育に関する考察と実践－流通経済大学のキャリア教育への取り組みを通じて、創立五十周年記念論文集、1、149-171、2016
- 30) 村上竜馬・原千恵子・三好一英：大学生のアイデンティティと職業選択の年次変化－アンケート調査結果の分析－、東京福祉大学・大学院紀要、6 (1)、39-46、2015
- 31) 小野憲一：本学の体育会に所属する学生におけるキャリア意識に関する研究－「大学生のキャリアと就職に関する調査」結果を通して (1)、環太平洋大学研究紀要、8、123-133、2014
- 32) 松尾寛子：大学生の就職活動と体育会所属との関係についての研究、京都大学学生総合支援センター紀要、47、25-39、2018